

ダストバック利用によるハエ類防除試験

佐々江洋太郎・豊福博文・伊丹豊一・一野俊彦・杉崎治男
(大分県畜産試験場)SASAE, Y., TOYOFUKU, H., ITAMI, T.,
ICHINO, T. and SUGISAKI, H.Surveys on the Life Cycle of Flies on Pasture and
the Eradication with Dust Bag.

従来から放牧牛に寄生する外部寄生虫の防除は主としてダニを対象としたものであったが、最近放牧牛に寄生するハエ類が流行性眼病、乳房炎等の各種病原菌を伝播するだけでなく、夏期における肉用牛の発育および増体の停滞、乳牛においては泌乳量の減少に重要な役割を果たしていることが明らかにされてきた。そこで本試験は当当地域の放牧地におけるハエ類の発生活長を調査するとともに、昭和49年から50年にかけてダストバック（以下DBと略称）を利用したハエ類の防除効果について検討したので、結果の概要を報告する。

試験方法

当当地域の放牧地に発生するハエ類の同定とその季節的消長の調査については、牛体に寄生するハエ類を捕虫網によって採集するスーピング法により行ない、DBのハエ類防除効果については牛体に寄生するハエ類を目算することによって行うカウント法により調査した。DBは低毒性のカーバメイト系薬剤を使用し、放牧地内のパドックの出入口や水飲場への誘導柵の途中に設置した。なおDBの設置期間は7月始めから10月末までの約4ヵ月間とした。

試験結果と考察

① ハエ類の発生活長について

6月から10月にかけてスーピング法により採集した標本を同定した結果、ノサシバエが大部分であったが、その他サシバエ、ミナミサシバエ、アブ類および非吸血性のハエ類の6種類に大別された。ノサシバエは7月上旬以降寄生数が増加し、8月下旬から9月上旬にかけてが発生のピークであることが認められた。サシバエ、ミナミサシバエは8月中旬までほとんど寄生が認められず、9月から10月にかけて寄生数が幾分増加する傾向を示し

た。アブ類については8月下旬から9月上旬に採集されたのみで、数的にも多くはなく種類はホルバートアブが大部分でタイワンシロアブとメクラアブが数頭認められた。非吸血性のハエ類は調査期間を通じて数多く採集されたが、とくに8月下旬から9月上旬にかけて顕著な寄生が認められた。種類はノイエバエが大部分で、クロイエバエ、ウスイロイエバエおよびセジロハナバエが若干認められた。

② DB利用によるハエ類防除効果について

DB設置後ノサシバエの寄生数は著しく減少し、1週間から2週間後にはほとんどその姿を消したところから、DBのノサシバエに対する顕著な防除効果が認められた。しかしながら非吸血性のハエ類についてはとくにDBの設置によって寄生数が減少するというような傾向は認められなかった。これらについては昭和49年および50年の試験結果において同様な傾向が認められた。また初年次はDBを継続的に使用したが、2年次は不連続に使用し、DBによってノサシバエの発生を抑制した後DBを撤収した。これによってDBの防除効果がどの程度継続するか調査したところ、DB撤収後1週間程度でノサシバエの再発生が認められ、2週間後には顕著な寄生状況に戻る傾向を示した。

③ DB利用上の問題点について

DBは水分を含むと薬剤が固型化し効果が著しく減少するので、雨対策についてはDBの構造上十分考慮する必要があるが、放牧地の環境条件からみて雨を防ぐには限度があり、牛体も濡れているので雨天が続く場合はDBを撤収し、天候の安定する時期にDBを使用することが望ましい。また非吸血性のハエ類の防除対策はその生態からみて困難であるが忌避剤等の薬剤面からの検討が今後とも必要である。